

水稻（種子消毒）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名(商品名)	いもち病、 ばか苗病、 ごま葉枯病の 同時消毒	いもち病、 ばか苗病、 ごま葉枯病、 苗立枯細菌病、 もみ枯細菌病の 同時消毒	もみ枯細菌病	イネシンガレ センチユウ
エコホープ	●	△		
エコホープドライ		●※		
エコホープDJ		●※		
シードラック水和剤		●	△	●
スターナ水和剤			●	
スミチオン乳剤				●*
スポルタック乳剤	●			
スポルタックスターナSE		●		
タフブロック		●※		
テクリードCフロアブル		●		
トリフミン乳剤	●			
パダンSG水溶剤				●
ヘルシード乳剤	●			
ヘルシードTフロアブル	●	△※※		
ペンレートT水和剤20	●	△※※※		△
ホーマイ水和剤	●			△
モミガードC水和剤	●	△		

※：ごま葉枯病を除く

※※：苗立枯細菌病を除く

※※※：苗立枯細菌病を除く、もみ枯細菌病は種子粉衣

*：登録のないメーカーも存在するため、ラベルに注意。

(1) いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病の同時消毒

(生態と防除のねらい)

- ① うるちは比重1.13、もちは比重1.10の塩水選を必ず実施して、保菌もみを除去する。
- ② 播種量は箱あたり200g以下（置床式は180g以下）とする。育苗中は温度を30℃以下に保ち、過湿にならないよう十分注意する。
- ③ 種子消毒により多くの病害の初期被害の軽減が可能となるので、必ず実施する。

FRAC		農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名			
BM02	エコホープ	トリコデルマ アトロビリデ水和剤		—	
MO3 1	ベンレートT水和剤20	チウラム・ベノミル水和剤		普	
MO3 1	ホーマイ水和剤	チウラム・チオファネートメチル水和剤		普	
MO3 3	ヘルシードTフロアブル	チウラム・ペフラゾエート水和剤		普	
3	スポルタック乳剤	プロクロラズ乳剤		普	
3	トリフミン乳剤	トリフルミゾール乳剤		普	
3	ヘルシード乳剤	ペフラゾエート乳剤		普	
MO1 12 3	モミガードC水和剤	銅・フルジオキシニル・ペフラゾエート水和剤		普	

(薬剤使用上の注意事項)

- ① 塩水選後、もみが乾かなくうちに薬剤処理する。薬液に浸漬中は数回攪拌する。
- ② ベンレートT水和剤20及びホーマイ水和剤は消毒後の風乾を十分行う。また、その他の薬剤についても湿粉衣や10分間浸漬処理では風乾を行う。
- ③ 流水での浸種は薬効が低下するので、避ける。浸種の浴比は種糶：水＝1：2程度とし、最初の2日間は水の交換を行わない。
- ④ 処理後の残液が河川、池などに流入しないよう注意する。

(2) もみ枯細菌病
(生態と防除のねらい)

- ① 育苗箱では苗立枯（苗腐敗症）をおこす。
- ② 病原菌は種子伝染するので、必ず種子消毒を実施する。

農薬名		毒性	備考
FRAC	商品名 一般名		
31	スターナ水和剤 オキシリニック酸水和剤	普	

(薬剤使用上の注意事項)

- ① オキシリニック酸水和剤は前項（１）に掲げた種子消毒剤との混用による同時種子消毒が可能である。
- ② オキシリニック酸を含有する剤は、効果を高めるために浸漬処理後浸種前に必ず風乾する。

(3) いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病の同時消毒
(生態と防除のねらい)

- ① 育苗期間中は高温となるため、もみ枯細菌病菌や苗立枯細菌病菌による立枯症が発生しやすい早期水稻では、銅またはオキシリニック酸を含む薬剤による種子消毒が望ましい。

農薬名		毒性	備考
FRAC	商品名 一般名		
BM02	エコホープドライ トリコデルマ アトロビリデ水和剤	-	ごま葉枯病を除く
BM02	エコホープDJ トリコデリマ アトロビリデ水和剤	-	ごま葉枯病を除く
BM02	タフブロック タラロマイセス フラバス水和剤	-	ごま葉枯病を除く
	シードラック水和剤 金属銀水和剤	普	イネシンガレセンチュウ登録あり
3 M01	テクリードCフロアブル イプコナゾール・銅水和剤	普	
31 3	スポルタックスターナSE オキシリニック酸・プロクロラズ水和剤	普	

(薬剤使用上の注意事項)

- ① テクリードCフロアブルで心枯線虫病との同時種子消毒を行う場合は、パダンSGとの混用ができないので、MEP乳剤（スミチオン）を使用する。
- ② オキシリニック酸を含有する剤は、効果を高めるために浸漬処理後浸種前に必ず風乾する。

(4) イネシンガレセンチュウ
(生態と防除のねらい)

- ① 主な伝染源は汚染種のみであるので、種子消毒によりほぼ完全に防除可能である。

農薬名		毒性	備考
FRAC/ IRAC	商品名 一般名		
	シードラック水和剤 金属銀水和剤	普	
1B	スミチオン乳剤 MEP乳剤	普	
14	パダンSG水溶剤 カルタップ水溶剤	劇	

(薬剤使用上の注意事項)

- ① シードラック水和剤以外は、いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病との同時消毒を行う。

水稻（病害防除箱処理剤）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	白葉枯病	もみ枯細菌病	いもち病	紋枯病	萎縮病 （ツマグロヨコバイ）	縞葉枯病 （ヒメトビウンカ）
エバーゴル箱粒剤				●		
エバーゴルフォルテ箱粒剤	△	△	●	●	△	△※
オリゼメート粒剤	●	△	●			
オンコル粒剤5					●	●
ガゼット粒剤					●	●
グレータム箱粒剤				●		
サンフェスタ/サントリプル箱粒剤	△	△	●		△	△※
スタウトダントツ箱粒剤	△	△	●		△	△※
チェス粒剤						●※
ツインターボ箱粒剤08	△	△	●		△	△※
ツインターボフェルテラ箱粒剤	△		●		△	△※
デジタルミネクト箱粒剤			●		△	△
D r. オリゼ箱粒剤	●	△	●			
パダン粒剤4					●	
ビーム粒剤			●			
ビルダープリンス粒剤	△	△	●			△※
ビルダーフェルテラチェスGT粒剤			△	●	△	△※
ブーンアレスマンガレス箱粒剤	△	△	●	●	△	△※
ピカピカ粒剤			●			△※
ブーン箱粒剤	△	△	●			
ブイゲット箱粒剤	●	△	●			
フジワン粒剤			●			
リンバー箱粒剤				●		
ルーチンバリアード箱粒剤	△	△	●		△	
ルーチンエキスパート箱粒剤	△	△	●	●	△	△※

※ ウンカ類登録

(1) 白葉枯病 *Xanthomonas oryzae* pv. *oryzae*

(生態と防除のねらい)

- ① 第一次伝染源の主なものは宿根性のイネ科雑草サヤヌカグサであるが、春まで生存している刈株や前年の被害わらも伝染源となる。
- ② 伝染源からの病原菌は水の媒介によってイネの葉の水孔から侵入する。このため、本田初期の浸冠水が発生の最も大きな原因である。機械移植（直まきも含む）の場合は本田初期の冠水によって多発することもある。
- ③ 一般的には分けつ最盛期頃から病徴が現れ、夏期の高湿時に一時停滞し、その後出穂期前後から再び病勢が激しくなるのが普通であるが、多発生の場合には幼穂形成期ごろから急激にまん延する。窒素の多用、多雨少照、台風などは伝搬を助長する。
- ④ 初発生、暴風雨、浸冠水後直ちに散布するが、出穂後は防除効果が低い。

農薬名			毒性	備考
FRAC	商品名	一般名		
P02	オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普	
P02	D r.オリゼ箱粒剤	プロベナゾール粒剤	普	
P03	ブイゲット箱粒剤	チアジニル粒剤	普	

(薬剤使用上の注意事項)

- ① オリゼメート粒剤は箱苗と本田の2回処理の効果が高い。いもち病との同時防除剤として使用する。

(2) いもち病 *Pyricularia oryzae* (異名 *Pyricularia grisea*, *Dactylaria oryzae*)

(生態と防除のねらい)

- ① 第一次伝染源は前年の被害わら及び籾がらで、春温度が高くなると野外で分生子を形成し、伝搬する。また、病籾も第一次伝染源となる。
- ② イネの発芽時から成熟期まで発生し、苗いもち、葉いもち、穂いもち(穂首、枝梗、節など)となり、それぞれに応じた防除対策が必要である。
- ③ 低温、日照不足、多湿が続くと病原菌の増殖が盛んになり、その上イネの体質が弱くなるので、広い地域にわたって大発生する。
このような年は適切に防除を行わないと大きな被害を受ける。
- ④ 窒素肥料の過多など栽培方法を誤ると通常年でも多発することがある。
- ⑤ 葉いちは初発生時の防除が効果的である。葉いちは穂いちの伝染源となるので、葉いちを少発生に抑えることが重要である。

農薬名			毒性	備考
FRAC/ IRAC	商品名	一般名		
P02	D r. オリゼ箱粒剤	プロベナゾール粒剤	普	
P02	オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普	
2B P02	ビルダープリンス粒剤	フィプロニル・プロベナゾール粒剤	普	
P03	ブイゲット箱粒剤	チアジニル粒剤	普	
4A P03 7	エバーゴルフフォルテ箱粒剤	イミダクロプリド・イソチアニル・ペンフルフェン粒剤	普	
4A P03	スタウトダントツ箱粒剤	クロチアニジン・イソチアニル粒剤	普	
4A P03	ルーチンバリアード箱粒剤	チアクロプリド・イソチアニル粒剤	普	
4A P03	ツインターボ箱粒剤 O 8	クロチアニジン・イソチアニル粒剤	普	
4A 5 P03 7	ルーチンエキスパート箱粒剤	イミダクロプリド・スピノサド・イソチアニル・ペンフルフェン粒剤	普	
4A 28 P03	ツインターボフェルテラ箱粒剤	クロチアニジン・クロラントラニリプロール・イソチアニル粒剤	普	
P08	ブーン箱粒剤	ジクロベンチアゾクス粒剤	普	
28 4A 16.3	サンフェスタ箱粒剤 サントリプル箱粒剤	クロラントラニリプロール・ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	普	長期残効性あり
6	フジワン粒剤	イソプロチオラン粒剤	普	
16.1	ビーム粒剤	トリシクラゾール粒剤	普	
2B 6 16.1	ピカピカ粒剤	フィプロニル・イソプロチオラン・ピロキロン粒剤	普	
28 16.1	デジタルミネクト箱粒剤	シアントラニリプロール・ピロキロン粒剤	普	

(3) 紋枯病 *Thanatephorus cucumeris*

(生態と防除のねらい)

- ① 主な伝染源は病斑に形成された菌核で、病株から田面やあぜに落ちた菌核は土壤中で越冬し、翌年代かきなどによって水面に浮上し、稲株に付着して発病する。
- ② 病原菌は高温多湿を好むため、これらの条件がそろって発病、まん延が甚だしく、また多肥、密植などイネが過繁茂するような場合も発病が多くなる。
- ③ 気温が22～23℃以上になるとイネに付着した菌核が発芽して侵入を開始する。
- ④ 上位葉鞘への進展は幼穂形成期以降となり、高温であれば進展は急激である。

農薬名			毒性	備考
FRAC/ IRAC	商品名	一般名		
7	リンパー箱粒剤	フラメトピル粒剤	普	
7	グレートム箱粒剤	チフルザミド粒剤	普	
7	エパーゴル箱粒剤	ペンフルフェン粒剤	普	
4A P03 7	エパーゴルフォルテ箱粒剤	イミダクロプリド・イソチアニル・ペンフルフェン粒剤	普	
4A 5 P03 7	ルーチンエキスパート箱粒剤	イミダクロプリド・スピノサド・イソチアニル・ペンフルフェン粒剤	普	
28 9B 7 P02	ビルダーフェルテラチェスGT粒剤	クロラントラニリプロール・ピメトロジン・チフルザミド・プロベナゾール粒剤	普	
37 7 P08	ブーンアレスモンガレス箱粒剤	オキサゾスルフィル・インピルフルキサム・ジクロベンチアゾクス粒剤	普	

(4) 萎縮病 *Rice dwarf virus* (RDV) <ツマグロヨコバイ>、縞葉枯病 *Rice stripe virus* (RSV) <ヒメトビウンカ>

(生態と防除のねらい)

- ① 表中の薬剤は、ツマグロヨコバイ及びヒメトビウンカに登録のある有効薬剤である。
このほか、ウンカ類で登録のある薬剤（セジロウンカ、トビイロウンカの項を参照）も有効である。
- ② 粒剤は育苗期～本田初期を重点に、虫害そのものよりも、むしろツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病対策として散布し、後期はセジロウンカ、トビイロウンカを主対象とした防除により併殺する。
- ③ 薬剤抵抗性ツマグロヨコバイには、有機リン剤とカーバメート剤の混合剤が有効でメイチュウ等も同時に防除できる。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
1A	オンコル粒剤 5	ベンフラカルブ粒剤	普	
1A	ガゼット粒剤	カルボスルファン粒剤	劇	
9B	チェス粒剤	ピメトロジン粒剤	普	ウンカ類登録
14	パダン粒剤 4	カルタップ粒剤	劇	ツマグロヨコバイに登録 播種前は床土混和

(薬剤使用上の注意事項)

- ① 被害を避けるため、カルタップ剤は移植当日に苗箱施薬を行う。
- ② 移植後数日間は湛水する。

水稻（病害防除苗立枯病）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	苗立枯病 （ピシウム）	苗立枯病 （トリコデルマ）	苗立枯病 （リゾープス）	苗立枯病 （フザリウム）	幼苗腐敗症 （もみ枯細菌病）
カスミン粒剤					●
ダコニール1000			●		
ダコレート水和剤		●	●	●	
タチガレースM粉剤	●			●	
タチガレースM液剤	●			●	
タチガレファイト液剤	●			△	
タチガレン液剤	●			●	
タチガレン粉剤	●			●	
ナエファインフロアブル	●		△	△	

(1) 幼苗腐敗症
(生態と防除のねらい)

① もみ枯細菌病菌により発生し、育苗箱では苗立枯をおこす。

FRAC	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
24	カスミン粒剤	カスガマイシン粒剤	普 普 普	育苗培土に均一に混和する 育苗箱には種した種粒の上から均一に散布する 覆土に均一に混和する

(2) 苗立枯病（ピシウム）、苗立枯病（トリコデルマ）、苗立枯病（リゾープス）、苗立枯病（フザリウム）

(生態と防除のねらい)

- ① フザリウム、ピシウム、リゾープス及びトリコデルマ菌等に起因する。
- ② 育苗箱の資材は、使用前または使用後に消毒する。
- ③ 出芽期の高温多湿の悪条件で発生が助長されるので、温度や播種時の灌水量に注意する。
- ④ ピシウム、トリコデルマによる苗立枯病は育苗期の低温でも発生が助長される。

FRAC	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
MO5	ダコニール1000	TPN水和剤	普	リゾープスに登録 育苗箱土壌灌注
1 MO5	ダコレート水和剤	ベノミル・TPN水和剤	普	灌注、トリコデルマ、リゾープス、フザリウムに登録
32 4	タチガレエースM粉剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシルM粉剤	普	ピシウム、フザリウムに登録 育苗箱土壌に均一に混和する
32 4	タチガレエースM液剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシルM液剤	普	ピシウム、フザリウムに登録 育苗箱土壌灌注
32	タチガレファイト液剤	ヒドロキシイソキサゾール複合肥料	普	ピシウムで効果確認 育苗箱土壌灌注
32	タチガレン粉剤	ヒドロキシイソキサゾール粉剤	普	(箱育苗) ピシウム、フザリウムに登録 育苗箱土壌に均一に混和する
32	タチガレン液剤	ヒドロキシイソキサゾール液剤	普	ピシウム、フザリウムに登録 育苗箱土壌灌注
U17	ナエファインフロアブル	ピカルブトラゾクス水和剤	普	ピシウムで効果確認 育苗箱土壌灌注

水稻（害虫防除箱処理剤）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	ツマ グロ ヨコ バイ	ヒメ トビ ウン カ	セジ ロウ ンカ	トビ イロ ウン カ	イネ ゾウ ムシ	イネ ドロ オイ ムシ	イネ ミズ ゾウ ムシ	コブ ノメ イガ	フタ オビ コヤ ガ	イネ ツト ムシ	ニカ メイ チュウ	イネ クロ カメ ムシ	イナ ゴ類	スク ミリン ゴガ イ
アクタラ箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※		△	△							
アレス箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※		△	△	△	△	△	△		△	
オンコル粒剤5	●	●	△			△	●							
ガゼット粒剤	●	●			△	△	●							
ダントツ箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※		●	△		△		△	△		
スタークル／アルバリン箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※		△	△		△		△	△		
スピノエース箱粒剤								●	△	●	●			
チェス粒剤		●※※	●※※	●※※										
ディアナ箱粒剤								●						
パダン粒剤4	●				●*	●	●	△			△			●
フェルテラ箱粒剤	△					●	△	●	●	●	△			
プリンス粒剤		△※※	●※※	●※※		●	●	●		●	●	●	●	
ゼクサロン箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※										
リディア箱粒剤	△	△※※	●※※	●※※		△	△		△	△	△		△	

●* 幼虫登録 △：本指針には採用していないが登録がある

※※ ウンカ類登録

ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカの詳細については病害防除箱処理剤 萎縮病 縞葉枯病の項を参照

(1) セジロウンカ

(生態と防除のねらい)

- ① 成虫は、梅雨期に海外から飛来し、発生源となる。
- ② 飛来成虫の防除を目的に育苗箱施薬を実施する。
- ③ フィプロニル剤は近年薬剤抵抗性が問題となっている。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	薬剤感受性低下事例あり、ウンカ類登録
4A	アクタラ箱粒剤	チアメトキサム粒剤	普	ウンカ類登録
4A	ダントツ箱粒剤	クロチアニジン粒剤	普	ウンカ類登録
4A	スタークル/アルバリン箱粒剤	ジノテフラン粒剤	普	ウンカ類登録
4E	ゼクサロン箱粒剤	トリフルメゾピリム粒剤	普	ウンカ類登録 スクラム箱粒剤、ビルダーフェルテラゼクサロン箱粒剤、フルスロトル箱粒剤、アンコール箱粒剤、ブーンゼクテラ箱粒剤、ブイゲットハコレンジャーL粒剤、ブイゲットパラタスL箱粒剤（以上の混合剤については使用時期が異なるので注意）
4F	リディア箱粒剤	フルピリミン粒剤	普	ウンカ類登録 混合剤としては、Dr. オリゼリディア箱粒剤
9B	チェス粒剤	ピメトロジン粒剤	普	ウンカ類登録
37	アレス箱粒剤	オキサゾスルフィル粒剤	普	ウンカ類登録 混合剤としてはブーンアレス箱粒剤

(2) トビイロウンカ

(生態と防除のねらい)

- ① 成虫は、梅雨期に海外から飛来して発生源となり増殖し、第3世代の発生する9月以降に坪枯れを起こす。
- ② 飛来成虫の防除を目的に育苗箱施薬を実施する。
- ③ イミダクロプリド、チアメトキサム、クロチアニジンは近年薬剤抵抗性が問題となっている。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	ウンカ類登録
4A	アクタラ箱粒剤	チアメトキサム粒剤	普	薬剤感受性低下事例あり、ウンカ類登録
4A	ダントツ箱粒剤	クロチアニジン粒剤	普	薬剤感受性低下事例あり、ウンカ類登録
4A	スタークル/アルバリン箱粒剤	ジノテフラン粒剤	普	ウンカ類登録
4E	ゼクサロン箱粒剤	トリフルメゾピリム粒剤	普	ウンカ類登録 スクラム箱粒剤、ビルダーフェルテラゼクサロン箱粒剤、フルスロトル箱粒剤、アンコール箱粒剤、ブーンゼクテラ箱粒剤、ブイゲットハコレンジャーL粒剤、ブイゲットパラタスL箱粒剤（以上の混合剤については使用時期が異なるので注意）
4F	リディア箱粒剤	フルピリミン粒剤	普	ウンカ類登録 混合剤としては、Dr. オリゼリディア箱粒剤
9B	チェス粒剤	ピメトロジン粒剤	普	ウンカ類登録
37	アレス箱粒剤	オキサゾスルフィル粒剤	普	ウンカ類登録 混合剤としては、ブーンアレス箱粒剤

(3) イネゾウムシ、イネドロオイムシ

(生態と防除のねらい)

- ① いずれも年1回の発生で、成虫で越冬する。
- ② 成虫の防除を目的に育苗箱施薬を実施する。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	イネドロオイムシ登録
4A	ダントツ箱粒剤	クロチアニジン粒剤	普	イネドロオイムシ登録
14	パダン粒剤 4	カルタップ粒剤	劇	イネゾウムシ幼虫、イネドロオイムシ登録 は種前は床土混和
28	フェルテラ箱粒剤	クロラントラニリプロール粒剤	普	イネドロオイムシ登録

(薬剤使用上の注意事項)

- ① パダン粒剤 4 は葉害を避けるため、育苗には移植当日に施用する。

(4) イネミズゾウムシ

(生態と防除のねらい)

- ① 成虫はイネの葉を、幼虫は根を食害するが、生育、収量への影響は幼虫の方が大きい。単為生殖を行い、雌だけが生息する。
- ② 越冬成虫による年1世代での被害が主体であるが、早期、普通期水稲があるところでは、一部の早発個体は第2世代が発生する（早期：第1世代、普通期：第2世代）。
- ③ 越冬場所は畦畔や土手などの草地、落葉下である。越冬成虫は4月中・下旬頃から活動を始め、越冬場所でイネ科雑草の新葉を摂食した後、水田へ飛来する。
- ④ 幼虫が成熟すると土まゆを作って蛹化し、6月中・下旬頃から新成虫が発生し始める。発生は7月中・下旬がピークとなる。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
1A	オンコル粒剤 5	ベンフラカルブ粒剤	普	
1A	ガゼット粒剤	カルボスルファン粒剤	劇	
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	
14	パダン粒剤 4	カルタップ粒剤	劇	は種前は床土混和

(薬剤使用上の注意事項)

- ① 多発が予想される場合は、粒剤の育苗箱施薬と本田の水面施薬による体系防除の効果が高い。
- ② パダン粒剤 4 は葉害を避けるため、育苗には移植当日に施用する。

(5) コブノメイガ、イネツトムシ

(生態と防除のねらい)

① コブノメイガは九州本土以北の国内では越冬できず、発生源は海外からの飛来による。

② 主な飛来は6月下旬～7月中旬に見られ、その後2～3世代を経過する。

③ 第1世代幼虫（7月）が分げつ盛期、第2・3世代（8～9月上旬）が止葉、次葉を食害する。特に第3世代幼虫の被害が出穂直前になると、穂の出すくみ等による減収を伴う場合がある。

④ イネツトムシは年3～4回発生する。早植え地帯では第1世代幼虫（6月中旬～7月上旬）、普通期栽培では第2世代幼虫（7月下旬～8月中旬）と第3世代幼虫（9月中旬～下旬）である。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	
5	スピノエース箱粒剤	スピノサド粒剤	普	
5	ディアナ箱粒剤	スピネトラム粒剤	普	ブノメイガ登録
28	フェルテラ箱粒剤	クロラントラニリプロール粒剤	普	

(6) フタオビコヤガ

(生態と防除のねらい)

① 局地的に発生し、本田初期～8月中旬頃まで幼虫が葉を食害するが、8月下旬には減少する。

② プリンス箱粒剤に対する薬剤感受性が低いので、多発地域では薬剤を変更するか追加防除を実施する。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
28	フェルテラ箱粒剤	クロラントラニリプロール粒剤	普	

(7) ニカメイチュウ

(生態と防除のねらい)

① 年2回発生し、稲わらまたは刈り株内で幼虫態で越冬する。一般に発蛾最盛期は、平坦部で6月下旬、山間部で6月上旬、2回目が平坦部・山間部とも8月4～5半旬である。

② 第2世代幼虫の防除を目的に育苗箱施薬を実施する。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普	
5	スピノエース箱粒剤	スピノサド粒剤	普	

(8) イネクロカメムシ

(生態と防除のねらい)

- ① 年1回発生し、水田周辺の土中等において成虫態で越冬する。5～6月の田植え後に畦畔付近から越冬成虫が侵入を始め、稲の株元で吸汁加害する。
- ② 成虫防除を目的に育苗箱施薬を実施すると効果が高い。

農薬名		毒性	備考
IRAC	商品名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普

(9) イナゴ類

(生態と防除のねらい)

- ① 葉を激しく食害し、多発すると葉やもみが食いつくされる場合がある。
- ② 翅の短いコバネイナゴと翅の長いハネナガイナゴがいるが、水田ではコバネイナゴが多い。
- ③ 昭和40～50年代にはほとんど見られなくなっていたが、昭和60年頃から再び多くなってきている。
- ④ あぜや休耕田の雑草が発生源になっているので、除草を徹底する。

農薬名		毒性	備考
IRAC	商品名		
2B	プリンス粒剤	フィプロニル粒剤	普

(10) スクミリングガイ

(生態と防除のねらい)

- ① 南米原産の淡水性巻貝で、水中ではえら呼吸、産卵などで地上に出た時は肺呼吸する。
- ② 乾燥には非常に強く貝蓋を閉じ、1年以上も生存する。
- ③ 耐寒性は弱く冬期の気温が低い、または高標高地は越冬生存率が低いと考えられる。
- ④ 殻厚は他の淡水産の貝類に比べて薄く、衝撃にも弱い。広葉雑草、水草を好み、若く軟らかい稲だけが加害を受ける。
- ⑤ 水田で越冬した貝と水路から侵入した貝が移植直後の若い稲（移植後3週間ぐらいまで）に被害を与える。
- ⑥ 発生田では、貝の行動を抑えるため浅水（1cm）管理にする。

農薬名		毒性	備考
IRAC	商品名		
14	パダン粒剤4	カルタップ粒剤	劇 食害防止、は種前は床土混和

- ① パダン粒剤4は薬害を避けるため、育苗には移植当日に施用する。

水稻（病害防除本田施用剤）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	白葉枯病	もみ枯細菌病	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	萎縮病 （ツマグロヨ コバイ）	縞葉枯病 （ヒメトビウ ンカ）
オリゼメート粒剤	●	●	●				
オリブライト1キロ粒剤	△		▼	●			
オリブライト250G	△		▼	△	△		
カスミン液剤			●				
ゴウケツパック	△	△	●				
ゴウケツモンスター粒剤		△	●	△	△	△	△※
ガツスター粒剤			●				
コラトップ粒剤5		●	●				
コラトップ1キロ粒剤12			●				
コラトップ豆つぶ		△	●				
撒粉ボルドー粉剤DL					●		
Zボルドー粉剤DL					●		
ドイツボルドーA					△		
トライフロアブル			●		△		
トライトレボン粉剤DL			●			△	△※
トレボン粉剤DL						●	●※
ノンプラス粉剤DL		△	●		△		
バシタック粉剤DL				●			
バシタックゾル				●			
バリダシン粉剤DL				●			
バリダシン液剤5		△		●			

※ウンカ類登録

*感受性低下事例あり

水稻（病害防除本田施用剤）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	白葉枯病	もみ枯細菌病	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	萎縮病 （ツマグロヨ コバイ）	縞葉枯病 （ヒメトビウ ンカ）
ビーム粉剤DL			●				
ビームエイトゾル			●				
ブラシン粉剤DL		△	●		△		
ブラシンフロアブル		△	△		●		
フジワン粒剤			●		△		
フジワン乳剤			●		△		
モンカット粒剤				●			
モンカット水和剤				●			
モンガリット粒剤				△	●		
モンカットファイン粉剤20DL				●			
モンセレン粉剤DL				●			
モンセレンフロアブル				●			
ラクオー・モンカット				●			
ラブサイド粉剤DL			●				
リンバー粒剤				●			

※ウンカ類登録

▼感受性低下事例あり

(1) 白葉枯病 *Xanthomonas oryzae* pv. *oryzae*

(生態と症状)

- ① 第1次伝染源の主なものゝ宿根性のイネ科雑草サヤヌカグサであるが、春まで生存している刈株や前年の被害わらも伝染源となる。
- ② 伝染源からの病原菌は水の媒介によってイネの葉の水孔から侵入する。このため、本田初期の浸冠水が発生の最も大きな原因である。機械移植（直まきも含む）の場合は本田初期の冠水によって多発することもある。
- ③ 一般的には分けつ最盛期頃から病徴が現れ、夏期的高温時に一時停滞し、その後出穂期前後から再び病勢が激しくなるのが普通であるが、多発生の場合には幼穂形成期ごろから急激にまん延する。窒素の多用、多雨少照、台風などは伝搬を助長する。

(防除)

- ① 県奨励品種を利用し、地域の特性に合った品種を選択する。
- ② 灌漑水路の清掃・整備を行い、雑草の除去や浸冠水を防止する。
- ③ 地域が推奨する施肥基準を参考に施肥を行い、過剰施肥を避ける。
- ④ 初発生、暴風雨、浸冠水後直ちに散布するが、出穂後は防除効果が低い。

農薬名		毒性	備考
FRAC	商品名		
P02	オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普

(薬剤使用上の注意事項)

(2) もみ枯細菌病 *Burkholderia gladioli*, *B. glumae*

(生態と症状)

- ① 夏期、特に分けつ期以降の高温は本病の発生の大きな要因であり、出穂開花期の高温、多湿は発病や伝染を助長する。保菌もみは育苗箱では苗立枯（苗腐敗症）をおこす。
- ② 籾は開花当日で最も感受性が高く、本田での感染期間は出穂期から出穂後10日までである。

(防除)

- ① もみ枯細菌病の防除適期は粉剤の場合、出穂期（全有効茎数の40～50%が出穂した時期）を中心に前5日、後4日の範囲内であり、最適期は前2日、後1日なので、時期を逸しないように散布を行う。

農薬名		毒性	備考
FRAC	商品名		
P02	オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普
16.1	コラトップ粒剤5	ピロキロン粒剤	普

(薬剤使用上の注意事項)

- ① コラトップ粒剤5は穂いもちとの同時防除として使用する。

(3) いもち病 *Pyricularia oryzae* (異名 *Pyricularia grisea*, *Dactylaria oryzae*)

(生態と症状)

- ① 第一次伝染源は前年の被害わら及び籾がらで、春温度が高くなると野外で分生子を形成し、伝搬する。また、病籾も第一次伝染源となる。
- ② イネの発芽時から成熟期まで発生し、苗いもち、葉いもち、穂いもち(穂首、枝梗、節など)となり、それぞれに応じた防除対策が必要である。
- ③ 低温、日照不足、多湿が続くと病原菌の増殖が盛んとなり、その上イネの体質が弱くなるので、広い地域にわたって大発生する。
このような年は適切に防除を行わないと大きな被害を受ける。
- ④ 窒素肥料の過多など栽培方法を誤ると通常年でも多発することがある。
- ⑤ 早期水稲では穂ばらみ期から出穂期が梅雨期にあたるので、穂いもちの発生に特に注意が必要である。
- ⑥ 葉いちは初発生時の防除が効果的である。葉いちは穂いもちの伝染源となるので、葉いもちを少発生に抑えることが重要である。

(防除)

- ① 本田に置かれた補植用の苗や余り苗は、病害の伝染源となるため、速やかに片付ける。
- ② 地域が推奨する施肥基準を参考に施肥を行い、過剰施肥を避ける。
- ③ いもち病発生予測モデル(BLASTAM)を活用し、病害の発生を予測する。
- ④ 穂いもちに対する粉剤防除は穂ばらみ期と穂揃い期の2回の散布が効果的である。

農薬名

FRAC IRAC	商品名	一般名	毒性	備考
PO2	オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普	
U16	トライフロアブル	テブフロキン水和剤	普	散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布
3A U16	トライトレボン粉剤DL	エトフェンプロックス・テブフロキン粉剤	普	
6	フジワン粒剤	イソプロチオラン粒剤	普	湛水散布
6	フジワン乳剤	イソプロチオラン乳剤	普	散布、ブームスプレーヤー・空中・無人航空機散布
11	オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロビン粒剤	普	散布、無人ヘリコプター散布。感受性低下事例あり
11	オリブライト250G	メトミノストロビン剤	普	散布、無人航空機散布。感受性低下事例あり
16.1	ビームエイトゾル	トリシクラゾール水和剤	普	散布、ブームスプレーヤー・空中・無人ヘリコプター散布
16.1	ビーム粉剤DL	トリシクラゾール粉剤	普	
16.1	コラトップ粒剤5	ピロキロン粒剤	普	
16.1	コラトップ1キロ粒剤12	ピロキロン粒剤	普	散布、無人航空機散布
16.1	コラトップ豆つぶ	ピロキロン剤	普	
16.1	ラブサイド粉剤DL	フサライド粉剤	普	
U14 16.1	ブラシン粉剤DL	フェリムゾン・フサライド粉剤	普	
16.1 U14	ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール・フェリムゾン粉剤	普	
16.3	ゴウケツバック	トルプロカルブ粒剤	普	水田に小包装(バック)のまま投げ入れる
4A 3 16.3	ゴウケツモンスター粒剤 ガッツスター粒剤	ジノテフラン・シメコナゾール・トルプロカルブ 粒剤	普	湛水散布
24	カスミン液剤	カスガマイシン液剤	普	散布、無人航空機散布。

(薬剤使用上の注意事項)

- ① フジワン粒剤はウンカ剤との体系処理で、セジロウンカ、トビイロウンカの増殖抑制効果が高い。
- ② オリゼメート粒剤は白葉枯病、もみ枯細菌病にも有効であるので、両病害の発生が懸念される地帯ではいもち病との同時防除剤として使用する。
- ③ コラトップ粒剤は穂いもち対象として処理した場合、もみ枯細菌病にも有効である。
- ④ フェリムゾンを含む剤は、たばこ、幼植物の大豆、小豆にはかからないように注意する。

(4) 紋枯病 *Thanatephorus cucumeris*

(生態と症状)

- ① 主な伝染源は病斑に形成された菌核で、病株から田面やあぜに落ちた菌核は土壤中で越冬し、翌年代かきなどによって水面に浮上し、稲株に付着して発病する。
- ② 病原菌は高温多湿を好むため、これらの条件がそろって発病、まん延が甚だしく、また多肥、密植などイネが過繁茂するような場合も発病が多くなる。
- ③ 気温が22～23℃以上になるとイネに付着した菌核が発芽して侵入を開始する。
- ④ 上位葉鞘への進展は幼穂形成期以降となり、高温であれば進展は急激である。

(防除)

- ① 地域が推奨する施肥基準を参考に施肥を行い、過剰施肥を避ける。
- ② 適切な栽培密度や植付本数で移植する。
- ③ 8月上旬と中旬の2回防除を基本とするが、1回防除の場合は出穂前の防除が効果的である。
- ④ 本病は混合剤によるウンカ類及びコブノメイガとの同時防除が効率的である。散布時期は8月上旬を中心とし、併殺効果をねらうべきである。

FRAC	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
U18	バリダシン液剤5	バリダマイシン液剤	普	散布、ブームスプレーヤー散布
U18	バリダシン粉剤DL	バリダマイシン粉剤	普	
7	バシタック粉剤DL	メプロニル粉剤	普	
7	バシタックゾル	メプロニル水和剤	普	散布、ブームスプレーヤー・空中・無人ヘリコプター散布
7	ラクオー・モンカット	フルトラニル粒剤	普	水田に小包装（パック）のまま投げ入れる
7	リンパー粒剤	フラメトピル粒剤	普	
7	モンカット水和剤	フルトラニル水和剤	普	
7	モンカット粒剤	フルトラニル粒剤	普	湛水散布
7	モンカットファイン粉剤20DL	フルトラニル粉剤	普	
11	オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロビン粒剤	普	散布、無人ヘリコプター散布
20	モンセレン粉剤DL	ペンシクロン粉剤	普	
20	モンセレンフロアブル	ペンシクロン水和剤	普	散布、ブームスプレーヤー・空中・無人ヘリコプター散布

(5) 稲こうじ病 *Villosiclava virens*

(生態と症状)

- ① 伝染源は耐久体の厚壁胞子であり、越冬した厚壁胞子は田植え後のイネの根や生長点に感染する。
- ② 厚壁胞子を保菌した種子をまくと、幼芽に感染し、出穂後にもみの発病がみられる。
- ③ 穂肥の窒素分が多かったり、遅効きすると発生しやすい。また、家畜糞尿を施用すると発病が助長されるので、発生田では施肥設計に注意する。

(防除)

- ① 地域が推奨する施肥基準を参考に施肥を行い、過剰施肥を避ける。

農薬名			毒性	備考
FRAC	商品名	一般名		
MO1	撒粉ボルドー粉剤DL	銅粉剤	普	
MO1	Zボルドー粉剤DL	銅粉剤	普	
U14 16.1	ブラシンフロアブル	フェリムゾン・フサライド水和剤	普	散布、ブームスプレイヤー・空中・無人航空機散布
3	モンガリット粒剤	シメコナゾール粒剤	普	湛水散布

(薬剤使用上の注意事項)

- ① モンガリット粒剤は、出穂2～3週間前に処理すると効果が高い。

(6) 萎縮病 *Rice dwarf virus* (RDV) <ツマグロヨコバイ>、縞葉枯病 *Rice stripe virus* (RSV) <ヒメトビウンカ>

(生態と症状)

- ① 萎縮病はツマグロヨコバイによって媒介、縞葉枯病はヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病である。

(防除)

- ① ツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカの防除対策を行う。
- ② 本田での罹病株を発見した際は、株の除去を行う。
- ③ 粒剤は育苗期～本田初期を重点に、虫害そのものよりも、むしろツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病対策として散布し、後期はセジロウンカ、トビイロウンカを主対象とした防除により併殺する。
- ④ 薬剤抵抗性ツマグロヨコバイには、有機リン剤とカーバメート剤の混合剤が有効でメイチュウ等も同時に防除できる。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	ウンカ類登録

水稻（害虫防除本田処理剤）

指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	ツマグロヨコバイ	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	イネゾウムシ	イネドロオイムシ	イネミズゾウムシ	コブノメイガ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	ニカメイチュウ	カメムシ類	イナゴ類	スクミリンゴガイ
アブロード水和剤	△ 幼	△ 幼	● 幼	● 幼										
エクシードフロアブル	△	△※	●※	●※								△	△	
エミリアフロアブル	△	△※	●※	●※		△		△				△		
エルサン乳剤	△	△※				△				△	△	●		
オーケストラフロアブル	△ 幼	△ 幼	● 幼	● 幼										
キラップフロアブル		△※	△※	△※		△						●	△	
キラップ粉剤DL		△※	△※	△※		△						●	△	
キラップ粒剤		△※	△※	●※								△		
スクミノン														●
スクミンベイト3														●
スタークル/アルバリン粉剤DL	△	△※	△※	●※		△				△	△	△	●	
スタークル/アルバリン粒剤	△	△※	●※	●※		△	△				△	△		
スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	△	△※	△※	●※								●		
スタークル豆つぶ	△	△※	△※	●※								△		
スミチオン乳剤		△				△		△	△	△	△	●		
スミチオン粉剤3DL		△※	△※	△※		△		△			△	●		
ダントツH粉剤DL	△	△※	△※	△※		△			△	△	△	●	△	
ダントツ水溶剤	△	△※	△※	△※		△						●		
ダントツ粉剤DL	△	△※	△※	△※		△				△		△	●	
チューンアップ顆粒水和剤								△	△	●	△			
トレボン粒剤	△	△※	●※	●※	△	△	●				△		●	
トレボン粉剤DL	●	●※	●※	●※		△	● 成	●	●	△	●	●	●	
トレボン乳剤	△	△※	●※	●※		△	△	●				●	●	
なげこみトレボン	△	△※	△※	△※		△	●				△		●	
パダンSG水溶剤						△	△	●	●		●			
パダン粒剤4								●	●	△	●			●
粒状石灰窒素40														●
粒状石灰窒素55														●
ロムダンゾル								●	●		●			
ロムダン粉剤DL								●	●	△	●			

成：成虫登録、幼：ウンカ類幼虫登録・ツマグロヨコバイ幼虫登録、

●：本指針に採用、△：本指針には採用していないが登録がある、※ウンカ類登録

ツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカについては「病害防除本田処理剤（6）萎縮病〈ツマグロヨコバイ〉、縞葉枯病〈ヒメトビウンカ〉」を参照

(1) セジロウンカ
(生態と防除のねらい)

- ① 日本では越冬できず、成虫は梅雨期に海外から飛来する。
- ② 飛来個体は、田植して間もないイネに産卵する傾向がある。
- ③ 卵は葉鞘の中に産み込まれ、茎の褐変症状を生じる。
- ④ 成幼虫は主に株元に生息し、葉鞘から養分を吸汁する。
- ⑤ 本虫により収量が減少するほどの被害が発生することは少ないが、発生が多い場合は坪枯れ症状が見られることがある。
- ⑥ イネ南方黒すじ萎縮ウイルスを媒介する。
- ⑦ 年により発生時期や量に差があるので、病害虫発生予察情報等を参考に、防除適期を逸さないように本田防除を行う。
- ⑧ フェニルピラゾール系薬剤は、感受性が低下しているため、使用を控える。

IRAC		農薬名		毒性	備考
①	②	商品名	一般名		
3A		トレボン粒剤	エトフェンプロックス粒剤	普	ウンカ類登録
3A		トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	ウンカ類登録
3A		トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー散布
4A		スタークル/アルバリン粒剤	ジノテフラン粒剤	普	ウンカ類登録
4C		エクシードフロアブル	スルホキサフロル水和剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布 混合剤としてはビームエイトエクシードゾル
4F		エミリアフロアブル	フルピリミン水和剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布
16		アプロード水和剤	ブプロフェジン水和剤	普	ウンカ類幼虫登録、散布、ブームスプレーヤー散布
UN		オーケストラフロアブル	ベンズピリモキササン水和剤	普	ウンカ類幼虫登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布

(薬剤使用上の注意事項)

- ① ブプロフェジン剤は遅効的であるが、残効が長く幼虫に対する効果が高い。

(2) トビイロウンカ

(生態と防除のねらい)

- ① 日本では越冬できず、成虫は梅雨期に海外から飛来する。
- ② 成幼虫は主に株元に生息し、葉鞘から養分を吸汁する。
- ③ 成虫が海外から飛来後、増殖を続け、第3世代が発生する9月以降に坪枯れを起こす。
- ④ ウンカ類に登録のある箱施薬剤を使用する。トリフルメゾピリム剤は効果が高い。
- ⑤ 年により発生時期や量に差があるので、病害虫発生予察情報等を参考に、防除適期を逸しないように本田防除を行う。
- ⑥ フェニルピラゾール系薬剤や、ネオニコチノイド系農薬の中には、感受性が低下しているものもあるため、使用を控える。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				
2B	キラップ粒剤	エチプロール粒剤	普	湛水散布、ウンカ類登録
3A	トレボン粒剤	エトフェンプロックス粒剤	普	ウンカ類登録
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	ウンカ類登録
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー散布
4A	スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶剤	普	ウンカ類登録
4A	スタークル/アルバリン粒剤	ジノテフラン粒剤	普	ウンカ類登録
4A	スタークル/アルバリン粉剤DL	ジノテフラン粉剤	普	ウンカ類登録
4A	スタークル豆つぶ	ジノテフラン剤	普	ウンカ類登録
4C	エクシードフロアブル	スルホキサフロル水和剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布 混合剤としてはビームエイトエクシードゾル
4F	エミリアフロアブル	フルピリミン水和剤	普	ウンカ類登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布
16	アプロード水和剤	ブプロフェジン水和剤	普	感受性低下事例あり、ウンカ類幼虫登録、散布、ブームスプレーヤー散布
UN	オーケストラフロアブル	ベンズピリモキサン水和剤	普	ウンカ類幼虫登録、散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布

(3) イネゾウムシ、イネドロオイムシ

(生態と防除のねらい)

- ① いずれも年1回の発生で、成虫で越冬する。
- ② 田植後水際付近の茎で成虫を見つけたら防除する。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				

※現在指針採用農薬なし。

(4) イネミズゾウムシ

(生態と防除のねらい)

- ① 国内に侵入した系統は単為生殖を行い、雌だけが生息する。
- ② 成虫はイネの葉を、幼虫はイネの根を食害する。
- ③ 越冬成虫がイネに産卵し、第1世代幼虫による根の加害により分けつが抑制され、被害が激しい場合は株が枯死する。
- ④ 成虫の越冬場所は畦畔や土手の枯れ草の下、山林の落葉の下などである。越冬成虫は4月中下旬頃から活動を始め、越冬場所でイネ科雑草の新葉を摂食した後、田植後の水田へ飛来する。
- ⑤ 幼虫が成熟すると土中で土まゆを作って蛹化し、新成虫の発生は7月中下旬がピークとなる。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				
3A	トレボン粒剤	エトフェンプロックス粒剤	普	
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	イネミズゾウムシ成虫登録
3A	なげこみトレボン	エトフェンプロックス油剤	普	水田に水溶性容器のまま投げ入れ

(5) コブノメイガ、イネツトムシ

(生態と防除のねらい)

- ① コブノメイガは九州本土以北の国内では越冬できず、発生源は海外からの飛来による。
- ② 主な飛来は6月下旬～7月中旬に見られ、その後2～3世代を経過する。
- ③ 第1世代幼虫（7月）が分けつ盛期の葉、第2・3世代（8～9月上旬）が止葉、次葉を食害する。特に第3世代幼虫の被害が出穂直前になると、穂の出すくみ等による減収を伴う場合がある。
- ④ イネツトムシは年3～4回発生する。早植え地帯では第1世代幼虫（6月中旬～7月上旬）、普通期栽培では第2世代幼虫（7月下旬～8月中旬）と第3世代幼虫（9月中旬～下旬）である。
- ⑤ 被害の発生は必ずしも全面的でなく、特に葉色の濃い品種、晩植え、窒素過多のイネ、または水害後の補植イネなどに多く発生する場合がある。
- ⑥ 幼虫はイネの葉を数枚つづり合わせて「つと（苞）」様の巣を作り、昼間はこの中にひそみ、夜出て葉を食害するので、防除は夕方行う方が効果的である。
- ⑦ 粒剤は発蛾最盛期（8月上～中旬頃）が防除の適期である。
- ⑧ 紋枯病、ウンカ類との同時防除が望ましい。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普	イネツトムシは未登録
14	パダン粒剤4	カルタップ粒剤	劇	
14	パダンSG水溶剤	カルタップ水溶剤	劇	
18	ロムダン粉剤DL	テブフェノジド粉剤	普	
18	ロムダンゾル	テブフェノジド水和剤	普	

(6) フタオビコヤガ

(生態と防除のねらい)

- ① 局地的に発生し、本田初期～8月中旬頃まで幼虫が葉を食害するが、8月下旬には減少する。
- ② 箱施薬剤の使用により、ニカメイガ等の他のチョウ目害虫との同時防除を行う。
- ③ 本田で発生が多い場合は、追加防除を行う。
- ④ IRACコード2Bの薬剤は感受性が低いので、使用を控える。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				
11A	チューンアップ顆粒水和剤	B T 水和剤	-	散布、無人航空機散布

(薬剤使用上の注意事項)

- ① チューンアップ顆粒水和剤はフタオビコヤガの発生初期に処理する。

(7) ニカメイチュウ

(生態と防除のねらい)

- ① 年2回発生し、稲わらまたは刈り株内で幼虫態で越冬する。一般に発蛾最盛期は、平坦部で6月下旬、山間部で6月上旬、2回目が平坦部・山間部とも8月4～5半旬である。
- ② 本虫若しくはチョウ目害虫に登録のある箱施薬剤を使用する。
- ③ 発生が多い場合は、本田防除を行う。
- ④ 混合剤による他病害虫との同時防除が効果的である。

農薬名			毒性	備考
IRAC	商品名	一般名		
①②				
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	
14	パダン粒剤4	カルタップ粒剤	劇	
14	パダンSG水溶剤	カルタップ水溶剤	劇	
18	ロムダン粉剤DL	テブフェノジド粉剤	普	
18	ロムダンゾル	テブフェノジド水和剤	普	

(8) カメムシ類

(生態と防除のねらい)

- ① 生育期間中の稲体の吸汁加害及び出穂期以降の穂の加害による斑点米の発生で、品質低下が問題となる。
- ② 斑点米カメムシ類は畦畔や耕作放棄地などのイネ科雑草の穂で増殖し、イネが出穂する頃に水田へ侵入する。
- ③ 出穂期以降の穂の加害による斑点米の発生で、品質低下が問題となる。
- ④ イネが出穂する10日前までに畦畔や耕作放棄地などのイネ科雑草を除去する。
- ⑤ 出穂期の本田における基幹防除を行う。
- ⑥ 年により発生時期や量に差があるので、病虫害発生予察情報等を参考に、追加防除の可否を判断する。
- ⑦ イネクロカメムシは7月中～下旬の防除効果が高い。

農薬名

IRAC	商品名	一般名	毒性	備考
① ②				
1B	エルサン乳剤	PAP乳剤	劇	
1B	スミチオン粉剤 3DL	MEP粉剤	普	
1B	スミチオン乳剤	MEP乳剤	普	散布、ブームスプレーヤー・無人航空機散布
2B	キラップ粉剤DL	エチプロール粉剤	普	
2B	キラップフロアブル	エチプロール水和剤	普	散布、ブームスプレーヤー・空中・無人ヘリコプター散布
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普	散布、ブームスプレーヤー散布
4A	スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶剤	普	
4A	ダントツ水溶剤	クロチアニジン水溶剤	普	散布、ブームスプレーヤー散布
4A	ダントツH粉剤DL	クロチアニジン粉剤	普	

(9) イナゴ類

(生態と防除のねらい)

- ① 葉を激しく食害し、多発すると葉やもみが食いつくされる場合がある。
- ② 翅の短いコバネイナゴと翅の長いハネナガイナゴがいるが、水田ではコバネイナゴが多い。
- ③ 昭和40～50年代にはほとんど見られなくなっていたが、昭和60年頃から再び多くなってきている。
- ④ あぜや休耕田の雑草が発生源になっているので、除草を徹底する。

農薬名

IRAC	商品名	一般名	毒性	備考
① ②				
3A	トレボン粒剤	エトフェンプロックス粒剤	普	
3A	トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス粉剤	普	
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普	
3A	なげこみトレボン	エトフェンプロックス油剤	普	水田に水溶性容器のまま投げ入れ
4A	スタークル/アルバリン粉剤DL	ジノテフラン粉剤	普	
4A	ダントツ粉剤DL	クロチアニジン粉剤	普	

(10) スクミリングガイ

(生態と防除のねらい)

- ① 南米原産の淡水性巻貝であり、雌雄異体で、寿命は2～3年。雌はピンク色の卵塊を水面より上に産卵する。
- ② 摂食活動は水温15～35℃で行い、14℃以下では活動を停止し、休眠する。
- ③ 圃場や用排水路で土中に潜って越冬し、越冬個体は地表から深さ6cm以内に分布することが多い。
- ④ 寒さに弱く、0℃で25日、-3℃で3日、-6℃で24時間以内に死亡する。越冬率は九州で5～10%。暖冬の年は越冬率が上がる。
- ⑤ 圃場では、冬期に稲わらがあると温床効果で越冬率が高まる。
- ⑥ 雑食性で、特に柔らかい植物を好み、イネは3～4葉期までが食害されやすいが、5葉期になるとほとんど食害されない（田植後3週間頃まで）。
- ⑦ 深水で被害が助長されるので、浅水管理を行う。
- ⑧ 水路からの貝の侵入を防止するため、取水口や排水口にネットや金網を設置する。
- ⑨ 濃いピンク色の卵塊は水中に落とすと呼吸ができずに死亡する。ふ化直前の淡いピンクの卵塊はふ化間近であるので、押しつぶして駆除する。
- ⑩ 収穫後、稲わらは土中にすき込み、越冬を困難にする。
- ⑪ 土中で越冬するので、厳寒期に耕耘し、寒さに晒して死滅させる。

IRAC		農薬名		毒性	備考
①	②	商品名	一般名		
14		パダン粒剤4	カルタップ粒剤	劇	食害防止
		スクミノン	メタアルデヒド粒剤	普	散布、無人航空機散布
		スクミンベイト3	燐酸第二鉄粒剤	普	散布、無人航空機散布
		粒状石灰窒素40	石灰窒素	普	荒起し後3～4cmに湛水し、3～4日後全面に散布、3～4日放置後植代を行う（漏水を防止すること）
		粒状石灰窒素55	石灰窒素	普	荒起し後3～4cmに湛水し、3～4日後全面に散布、3～4日放置後植代を行う（漏水を防止すること）

(薬剤使用上の注意事項)

- ① 石灰窒素は食害防止効果の期間が短いので、再侵入に注意し、他の薬剤との体系処理が効果的である。また、施肥設計についても考慮する。
- ② 石灰窒素の秋期刈取り後の処理は、3～4cmに湛水し、1～4日後全面に散布、3～4日放置する。漏水防止に留意すること。
- ③ 石灰窒素は農薬登録のあるものを使用する。
- ④ ショウリョクジャンボは、移植直後に散布できない。本田に成貝が生息する場合は、移植直後の貝による食害を防止するために移植直後の防除を併用する。